

下山

2024.2.1

五木寛之さんの本に『下山の思想』という本がある。本の説明にはこうある。

どんなに深い絶望からも人は立ち上がらざるを得ない。すでに半世紀も前に、海も空も大地も農薬と核に汚染され、それでも草木は根つき、私たちは生きてきた。しかし、と著者はここで問う。再生の目標はそこにあるのか。再び世界の経済大国をめざす道はない。敗戦から見事に登頂を果たした今こそ、実り多き「下山」を思い描くべきではないか、と。「下山」とは諦めの行動ではなく、新たな山頂に登る前のプロセスだ、という鮮烈な世界観が展望なき現在に光を当てる。成長神話の呪縛を捨て、人間と国の新たな姿を示す画期的思想。

五木さんは、次のように語っている。

私は以前『下山の思想』という本を書いたことがあります。人生の前半は必死で山頂を目指ばかりで、他のことを考える余裕もありませんけど、人生の後半生では昔のことに思いを馳せたり、それまで目に留まらなかった景色に感動したりしながら優雅に山を下っていくことができる。

下山というとマイナスに捉えられがちですが、下山には上りのときには味わえない喜びもあると思うんです。

人間というのは、諦めない生き物である。東日本大震災、その後の大きな地震、毎年のように繰り返される水害や台風などが、無力な人間を一気に襲う。だが、人はすぐに立ち上がる。呆然としているのは一瞬である。生きようとする。生きるのは、人の本能なのであろう。人は、動き出すと、ものすごいパワーを示す。自然の力は脅威だが、人の力は驚異的である。

40代半ばだった。南会津の教員住宅でふと考えた。我が人生も折り返し地点だな。そう思った途端に、怖くなってきた。今までは、前を向いていればよかった。とにかく前に進んでいればよかった。それが、折り返し地点を過ぎると、今までの道のりを視界に入れながらの走りとなる。非常に怖い。うまくいくだろうか。そんな焦りが自分を襲ってきた。

折り返しての走りを下山と捉えればよい。一冊の本により、そう思えるようになった。上りのときには味わえない喜び、それが何なのか。残念ながら、今のところ、わからない。きっと、これからは優雅に山を下っていくことができるのだろう。そう期待している。